

プラトンと北村透谷

——世界の二元性と恋愛の問題をめぐる——

和田義浩

一 プラトンと透谷における「二元論」的

世界観と「理想主義」について

に検討したい。

(1) 二つの世界

——「現象界」と「イデア界」(プラトン)、

「実世界」と「想世界」(透谷)

概念の精確さや、その厳密な意味内容について検討の余地が充分に残されていることを承知の上で述べることが許されるなら、プラトン(註28/7-348/7)と北村透谷(1888「明治元」1884「明治27」)が、一方は西洋古代哲学史上の、そして他方は日本近代文学史上の、いわゆるIdealism(イデア主義、理想主義)の先駆者であると同時にその代表者であるということ、またそのことと関連して、両者がともに、いわゆる「二元論」的世界観を表明していたということは、おそらく広く認められていることであろう。

ここではまずはじめに、「二元論」的世界観と「理想主義」という論点について、とりわけ両者の見解の共通性に着目し、具体的

哲学者プラトンが、現象世界一般の成立の原理として「イデア」(Idea)と呼ばれる不変・自己同一的な実体の实在性を定立し、現象的存在者、いわゆる「個物」の現象性を可能とする原理として規定したこと、またそうした彼の世界観が一般的に「イデア論」と称されていることは、広く知られている。

彼のイデア論は特にその中期の作品群の中で主題的に展開されているが、その中では真実在である「イデア」と、現実世界に現れる「個物」との存在論的区別が繰り返し強調されており、個物

に対するイデアの、現象界に対するイデア界の、存在論的優位が唱えられている。¹⁾

またそれと並行した形で、「魂」(psyche) 自らが純粹に、事物を實在・イデアとして認識する「知識」(episteme, etc.) と、魂が「肉体的」感覺器官を通じ、事物を現象・個物として捉える「感覺」(aisthesis) との認識論的区別が強調され、感覺に対する知識の優位が唱えられていることも、イデア論の重要な論点をなしている。²⁾

その一方において文学者である透谷は、プラトンがなしたような原理的「説明」を試みようとはしていないものの、様々な論題と場面に即した、特定の概念対立に訴えながら、「想世界」と「実世界」という表現に代表される二つの世界とその対立性について、具体的な描写を試みようとしている。³⁾

透谷にとって、我々が日常生活を送る「実世界」とは、「肉」「物質」「官能」性といった「物質」性と、「力としての自然」「不調子」といった概念に示される「暴力性」に支配された「娑婆」に他ならない。またそうした「実」のあり方に傷つき、「実」の世界を超え出ようとする「熱意」と「情熱」こそが、自由なる人間精神の生命原理であるというのが透谷の一貫した立場である。こうした熱意や情熱は、人間精神の「靈」としてのあり方を喚起して人間を「肉」から解き放ち、「自由」「美妙」にして「絶対的」な「理想」の世界へ、すなわち「想世界」へと羽ばたかせずに

はいられない——これが透谷の描く「実世界」と「想世界」の二元的な世界観であり、二つの世界の中間に立つ人間が「想」の世界を求める根源的な意義を説く「理想主義」の立場に他ならない。

以上の検討内容は、透谷がプラトンの作品と思想を、歴史的・實際的に、いかなる形で受容したのかを説明するものではない。哲学者プラトンより発せられたのち、その後の西洋世界に連綿と受け継がれ、西洋の近代的精神を支える根源的な契機となった「理念」、すなわち二元論的世界観と理想主義という理念が、新たに東西文明の交通と衝突の時代を迎えた明治期の日本に生きる文学者透谷を捉え、透谷を介して日本の文学界、思想界に受け入れられることになったという、いわば理念それ自体の歴史に対する関心に基づいて、本論は展開されている。

二 「恋愛」をめぐるプラトンと透谷の見解 ——共通性と差違——

これより先、前段の分析を踏まえながら新しい論点について検討する。二つの世界の間到我々人間が立たされるという事態が生起する場合に、あるいはこうした事態が実際に可能となるために人間の精神(あるいは生命)をして Ideal な世界、「想世界」へと向かわせる本源的な動因があるという点においても、プラトンと透谷の認識は根本的な一致を示している。それがいわゆる「恋愛」という概念であり、この概念をめぐる両者の具体的な見解に

他ならない。透谷がいわゆる「プラトニック・ラブ」の信奉者であり、この愛の本源的な機能について様々な機会に論評していることは、広く知られている。ここではプラトンと透谷が展開している具体的な議論から、両者の「恋愛」論について分析していきたい。

(1) 両者の共通性を形作る具体的な論点

① 人間の「中間性」から生じる「熱意」

物理的な状態において存在せざるを得ない日常の人間と日常の世界には、その物理性ゆえに、様々な限界や障害が抜き差しならぬ形で存在しているという強い意識が、プラトンと透谷に通底していることは、前段で確認したとおりである。両者はそうした日常的なあり方を超え、人間と世界の理想的な存在状態を目指す必要性を述べているわけだが、ここで重要なことは、日常性に向けられた意識というものが、両者にとって、理想世界への運動をはじめて可能とする、不可避的な要件として考えられている点である。⁷⁾

「知と無知の間」、ならびに「想世界と実世界の間」の争戦」といった概念により、プラトンと透谷は、人間の置かれている「中間性」に着目し、それが人間の精神をして「熱意」「思慕」、すなわち「恋愛」の情を発現させる絶対的な背景であることを指摘していることが分かる。そして人間をしてこうした中間性を知らし

め、熱意や愛を掻き立てずにはおかないものこそが「現実」に他ならないという点において、超えられるべきであるはずの「現実」のうちに一定の意義を見出さざるを得ないことになる。人間は肉としての制約を受け、「死すべきもの」である運命を避けられず、この世に生きる限り「不幸」な生を免れ得ないという強い現実認識こそが、両者の恋愛論を根本から支えていることを確認したい。⁸⁾

② 愛情の「上昇」と、その目的の「究（窮）極性」

さて、「現実」と「中間性」という動因から生じた熱意、すなわち「恋愛」は、人間をして何を求めさせ、いかなる境地への到達を目指しているか。⁹⁾

プラトンは『饗宴』や『パイドロス』といった作品の中で、恋愛の「段階性」と「上昇」について、そしてまた恋愛の「究極目的」すなわち「美そのもの」の絶対性とその本質について、詳細な分析と描写を試みている。他方、透谷はこの問題を独立した主題として取り上げることとはほとんどなく、そこに哲学者プラトンと、文芸家透谷の、思索のスタイルの違いを認めることができる。しかしながら、透谷がプラトンの恋愛観の理念を引き継ぎ、こうしていること、すなわち真正な愛情の「自然」な進展が、究極的にはこの現実世界を超えた、神聖にして高遠な境地に達するものでなければならぬことを強調していることは、彼の多くの論評から明らかである。

③ 「不自然」なる「獸性」の超克

まず、恋愛が欲望であり、それが人間の生命そのものを成り立たせている要素であること、またその意味において、恋愛の発端においてそこに肉欲が存在するとしても、それ自体は無理のないことであるという認識は、プラトンと透谷の両者に共通した理解であると言える。しかしながら両者において、そうした肉欲は「獸欲」と位置づけられ、恋愛の発展の過程において結局は揚棄されねばならないという点がより強調されねばならない。プラトンがそうした議論を繰り返していることは広く知られたことであるが、この論点に関する透谷の執拗な訴えは、ひときわ我々の関心を引く。

ここでは特に、プラトンと透谷の見解について、二つの点を指摘する。まず第一に、恋愛の過程における「肉情」は、両者にあつて、「獸欲」として否定的に捉えられているばかりか、一般には「自然な」ものと思われている。そうした欲望にふけることが、逆に「不自然な」ものとして明確に規定されている。先にも触れたように、プラトンと透谷にとって、真正な恋愛が持つ「自然」性とは、人間がその中間性を自覚し、自らが「肉」的存在であるがゆえに免れることができない、物理的制約や現実的困難を超えて高みへと向かおうとする、精神的運動性に他ならない。結局両者のそうした恋愛観は、「獸性」に対する見解を通じて、より一層明確さを増していることができよう。

そして第二に、「獸性」に対して同様の批判が展開されているとは言うものの、プラトンと透谷との間には微妙な視点の相違があることを無視することができない。端的に言えば、プラトンの焦点が恋愛における肉欲それ自体への批判に向けられているのに対し、透谷がその批評の主眼としているのは、とりわけ江戸元禄期以降の日本の大衆文学が、恋愛の「劣情」のみを「写実」し、それを理想化してきたという問題であった、ということである。この主題をめぐる透谷の論評は多岐にわたる、次に取り上げる「粹」の概念に対する透谷の批判的論評も、そうした一連の文学批評の一部として理解されるべきものである。

④ 「狂気」としての恋愛、「粹」との対立

真正な恋愛は「狂気」でなければならぬということ、先の③の論点と並び、プラトンと透谷の恋愛観を特徴づける最も明確な論点であると言える。とりわけプラトンの『パイドロス』の記事と、いわゆる「粹」の概念を批判した透谷の論評は注目される。両者は真正な恋愛の本質である「盲目」さや「狂気」の意義を重んじる一方で、「粹」に典型的に見られる心情、すなわち「惑」うことや「迷」うことを蔑み、「白昼の如」き「正気」に徹しようとする冷め切った情感を、厳しく非難している。そしてこれまでの議論を振り返れば、そうした非難の背景も明確となる。ここで言われている「正気」ならびに「狂気」とはあくまでも「この世」における正気であり狂気に他ならない。「この世」

をよしとし、「この世」に甘んじようとする心のあり方が「正気」であり、この世の現実から解き放たれ、高き彼方にある理想を追い求めようとする精神性が「狂気」と呼ばれているわけである。既に触れたように、「中間性」の自覚から、熱意、すなわち愛情が喚起され、その導きにより、この世・この現実から解き放たれ、彼方の理想へ向かおうとするところに、人間の精神の本源的な「自然な」あり方を認めようとするのがプラトンと透谷の立場であり、両者があえて「狂気」や「盲目」の意義を主題的に取り上げざるを得なかった理由もそこにあることが理解できる。

なお、既に指摘したとおり、この論点をめぐる透谷の議論は、主として元禄文学と、その流れを汲む大衆文学一般(1)に対する一連の批判的論評の中で展開されている。すなわち、透谷の主眼は、真正なる恋愛の本質を分析して説明することそれ自体ではなく、あくまでも真正なる恋愛の「実情」を描出するという、文芸本来のあり方を訴えることであった。そしてこの点については、改めて論じることになる。

(2) 両者の恋愛論の共通性に並存する差違

——透谷における恋愛論の「広がり」について

私はこれまで、プラトンと透谷の思想に通底する二元論的世界観と理想主義について簡単に触れた上で、そうした世界観を前提とした恋愛論に注目し、両者が展開する恋愛論の共通性について

論じてきた。これより先は、特に透谷の議論に焦点を合わせ、彼の恋愛論の先にある理念の広がりについて検討し、最終的にプラトンの恋愛論の意義そのものを捉え直す端緒を探ってみたい。

① 共通的な概念図式

——世界の「二元性」と、人間の「生命」

透谷とプラトンの恋愛論を支える基本概念は、人間の中間性と世界の二元性、ならびにこの世界を超出し、かの世界へと向かうとする情熱に他ならなかった。しかし透谷がこの概念図式によって描こうとしているのは、いわゆる「恋愛」とどまるものではない。恋愛は「希望」「熱意」「情熱」といった、透谷の強調する生命原理の、一つの様態に他ならない。社会論、文芸論、人間論、その他のあらゆるジャンルの評論を通して透谷が訴えているのは、時間性、物理性によって生じる現実の「争い」「不調子」「不調実」に直面した人間が、自らの不幸を痛感することを通して、逆に「霊」的世界、「理想界」「調実」の世界を思慕する「希望」「熱意」「情熱」が喚起されるという、精神的運動全般であり、そこに人間精神の「生命」の本質があるという、いわゆる「生命思想」に他ならない。⁽²⁾

② 「社会(界)」とのかかわり

——透谷の社会意識と「平和」論

評論活動を本格化させる以前から、透谷が当時の社会活動に深く関わっていたことはよく知られたことであるが、そうした事実

を離れても、透谷の手による論評の多くが、直接的、間接的に透谷の社会意識を反映したものであることは明らかである。そして注意深く読むなら、「平和」「反戦」「慈善事業」を求める透谷の具体的な議論とその理念が、先に確認した「生命思想」の基本的な概念図式に通底していることが分かる。強者と弱者、富者と貧者の間の争いや隔絶は、現実社会すなわち「実世界」が持つ「不調子」「不調実」性の現れに他ならず、人類はこうした「実」のあり方を超え、「調子」「調実」の実現を目指さなければならぬ、そしてこれを可能にするための精神的動因こそが、「博愛」や「同情」である¹⁵。

以上が社会問題を論じる透谷の基本的な概念図式だが、先に(1)において分析・検討した恋愛論と比較した場合、三つの際、だっただ対照性が見て取れる。まず第一に、彼の関心は終始「現実」に向けられており、現実を捨て、超然として理想世界に向かうことは認められていないという点である。そして第二に、ここで透谷が訴えているのは、実世界に生きるひとりの人間の精神性の問題ではなく、実世界の不調子に苦しむ人類全体の精神と、そこに属する一部であるところの各自の精神、この両者の向き合い方だという点である。ここに認められるのは精神の社会化であり、二元論と理想主義の概念が、社会的枠組みへと拡大されると同時に、そうした拡大が、社会的精神の自己形成として意識されている点に注目される。そして第三に、以上の二つの背景から、悪しき現実、

実世界へ向けられる思い（博愛、同情）が、より善きもの、想世界へ向けられる愛とならび、人間の精神的運動の本源的方向性として強調されている、という点である。以上のような点で透谷の生命思想は社会的な意義を見出すとともに、それが同時に透谷の文芸批評の思想的源泉をなしていることを、最後の論点として指摘したい。

③ 透谷の文芸批評の源泉

元禄期の大衆文学、ならびにその流れを継承する文学作品が、恋愛の「劣情」のみを写実し、同時に「粹」を理想化したことに對する透谷の批判とその理由については、すでに触れた(1)(1)④。しかし透谷が文芸批評の中で見せる激しい批判の論点はそうした恋愛の「軽佻さ」にとどまるものではない。その他の批判対象として主要なものには、いわゆる「写実」主義や「実用」主義が挙げられる。これらの文学上の態度が批判されるのも、すべて「現実」と現実における成功に至上の価値を置き、人間精神の本源的な運動性、すなわち人間の「生命」の意義をないがしろにするものだからに他ならない。

更に注目されるのは、文学者に「涙」を求める透谷の執拗な訴えである¹⁹。透谷は一貫して、詩人、文芸家に対し、実世界の不調子と、その中で苦しむ大衆のために「涙」することを訴え続けているが、透谷はこの現実への「涙」という概念によって、社会問題への直接的な取り組みと、文学活動とが、現実の人間社会に對

する働きかけであるという点で、本質を一にしていることを示していると言える。透谷が求めているのは、文学を通して人類に示されるべき理念と、文学が人類のもとに存在する存在意義との一致、すなわち、文学活動そのものが人類全体の本源的な生命を喚起させることに他ならない。その意味において、先の②の観点とこの③の観点とが一致を見ることになる。

三 最後に

——プラトンの恋愛をめぐる、

プラトンと透谷の距離について

プラトンの恋愛観と、その背景にある Idealism は、共に哲学者プラトンによる、哲学的思索を通じて表明されたものであった。その意味において、社会的な運動と文芸活動にまたがる実践家であった透谷の意識が、これらの理念について、すでにプラトンのそれとの間に一定の距離を有していることは当然のことと言えるかもしれない。しかしここで見落としてはならないのは、プラトンの「哲学」を支えていた意識は、透谷の場合に劣らず、極めて実践的な関心であったということである。プラトンの究極的な関心は、いかにして人間は自らの魂を浄めることができるのか、という点に向けられており、哲学は、プラトンにとって、人間が魂を浄化し得る、唯一の道に他ならなかった。この考えは師であるソクラテスの思想を引き継いだものと言えるが、プラトンは超越的

な世界を要請することで、魂の浄化をイデア的な対象への思慕と接近、あるいは帰還として説明しようとした。ただこの浄化の過程を通して高められるものは、哲学を通して自ら真理を愛した、哲学者の魂に他ならない。しかしながら高みに登ろうとする自己の精神の周囲に広がるもの——現実の強大な暴力を前に、自らを浄めることのできない多くの魂——をどのように受け止めればよいのか。人類の精神の総体である「社会（社界）」をして、自らを浄め高めるために、誰がどのような形で立ち上がりねばならないのか。こうした視野の広がりにより、プラトンの哲学的イデア主義から出発した Idealism は、西洋近代の Idealism を介して、やがて透谷の社会的理想主義へと展開して行くことになったのだと考えられる。私はここで両者の立場に対する価値的評価を下そうとするものではない。ただ最後に、ポリス社会のなかで人間の自律的な精神のあり方を問おうとしていたプラトンの理念が、数千年の時を経て、近代に至り、文明交流や衝突、社会の拡大と混乱という、いわゆる世界化の波に直面していた透谷に受け継がれ、そこで新しい意義を見出されようとしていたこと、そしてこのことは、同じく世界化の問題に直面している現代のわれわれにとっても、重大な指針をあたえてくれるのではないかということ、指摘したい。

※ 出典箇所として、プラトンについてはいわゆるステファヌス番号を、

また透谷については勝本清一郎校訂『北村透谷選集』（一九七〇年、岩波文庫）のページ数をそれぞれ記してある。

- (1) 『癡宴』(210E-211B)・『ペイン』(78D-E)・『国家』第五卷(475E-476D, 478E-480A)・同書第六卷(504E-505B, 507B)等参照。
- (2) 『ペイン』(79A-D)・『癡宴』(211E-212A)・『国家』第五卷(475E-476D, 478E-480A)等参照。
- (3) 『厭世詩家と女性』(82-83)・『人生に相渉るとは何の謂ぞ』(224-227)・『想像と空想』(229-230)・『内部生命論』(285)等参照。
- (4) 透谷はこれらの原理の意義と機能について、それぞれ「熱意」「情熱」と題される評論を著しているが、両者は本質的に同一の原理として理解されている。
- (5) プラトンの恋愛観への具体的言及としては、『内部生命論』(279)・『歌念仏』を讀みて(136)参照。その他『明治文学管見』(234)・『国民と思想』(298)等にもプラトンの立場への言及があるものの、具体的な引用は見あたらない。
- (6) 『厭世詩家と女性』(81)・『伽羅枕』及び『新葉末集』(39)・『歌念仏』を讀みて(135)等参照。
- (7) 『癡宴』(204A-B)・『厭世詩家と女性』(82-83)等参照。
- (8) 『癡宴』(206E-207A)・『歌念仏』を讀みて(136-137)等参照。
- (9) 『癡宴』(206A, 209E-210A, 210E-211B, 211B-C)・『ペイン』(249D-E)・『歌念仏』を讀みて(136-137)・『他界に対する概念』(201)等参照。
- (10) 『癡宴』(210A)・『ペイン』(255D-E)・『歌念仏』を讀みて(136)等参照。
- (11) 『ペイドロス』(250E)・『歌念仏』を讀みて(135-136)・『伽

羅枕』及び『新葉末集』(99-101)・『他界に対する概念』(201)・『厭世詩家と女性』(83)・『内部生命論』(279)等参照。

- (12) 『ペイドロス』で展開されている恋愛論は、恋する人間を「狂った者」、恋しない人間を「正気の者」と位置づけ、後者とのつき合いを好ましいものと評価するリュシアスの見解(『ペイドロス』244A)に対する反論として展開されたものである。そこでの意識は、「粹」を理想的な境地として崇められた元禄期以降の日本の価値観を執拗に攻撃する透谷の意識に通じている。
- (13) 『ペイドロス』(249D-E, 256E-257-A)・『粹を論じて』『伽羅枕』に及ぶ(93-94)・『伽羅枕』及び『新葉末集』(101-102)等参照。
- (14) 透谷は、当時の文壇の中心にあった二人の大家、すなわち尾崎紅葉と幸田露伴が、その意匠において対極性を示しながらも、ともに江戸時代(特に元禄期)の文学上の理念に強い影響を受けている点に着目し、両者を繰り返し論難している。両者に対する透谷の評価は必ずしも一貫したものは言えないが、「粹を論じて」『伽羅枕』に及ぶ(93-94)・『伽羅枕』に関する論評、『伽羅枕』及び『新葉末集』(紅葉、露伴のそれぞれの作品をめぐる、比較研究。前者への論評の比重大)・『情熱』(紅葉両者の文学的本質への言及)に、とりわけ注目すべき見解が示されている。
- (15) 『歌念仏』を讀みて(138)・『最後の勝利者は誰ぞ』(118-119)・『熱意』(287-288)・『内部生命論』(285)等参照。
- (16) 『平和』刊行の辞(104)・『最後の勝利者は誰ぞ』(118-120)・『慈善事業の進歩を望む』(331-332)等参照。
- (17) 理想主義者である透谷が、想世界への思慕が、実世界からの逃避に陥ってはならないことを、社会評論、文芸評論、人間論、他様々な評論において強調していることは極めて重要な事実である。具体

的には、「想像と空想」、「内部生命論」、「兆民居士安くにかある」等参照。

- (18) いわゆる「写実主義」批判については、「内部生命論」、「情熱」を論じて『伽羅枕』に及ぶ、『伽羅枕』及び『新葉末集』、『歌念仏』を讀みて、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」、等参照。そして「実用主義」批判については、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」、等参照。さらに透谷は、仏教思想の影響から、とりわけ江戸時代以降、「寂滅思想」が大きな勢力を得、それが「平民的虚無思想」の拡大につながったとしている。こうした虚無思想により、人々が「諦め」の境地から、結局は現実を肯定することに向かう——ここに透谷の批判の主眼がある。「徳川時代の平民的理想」、「歌念仏」を讀みて、「他界に関する觀念」、「情熱」、等参照。

透谷の批判全体に通底するのは、これらの文学的傾向において人間精神の本源的な「生命」が殺され、精神をして現実世界に甘んじさせることになる、という指摘に他ならない。

- (19) 「当代文学の潮模様」(2)、「時勢に感あり」(5)、「泣かん乎笑はん乎」(7)、「8」等参照。

(わだ・よしひろ、哲学、早稲田大学非常勤講師)